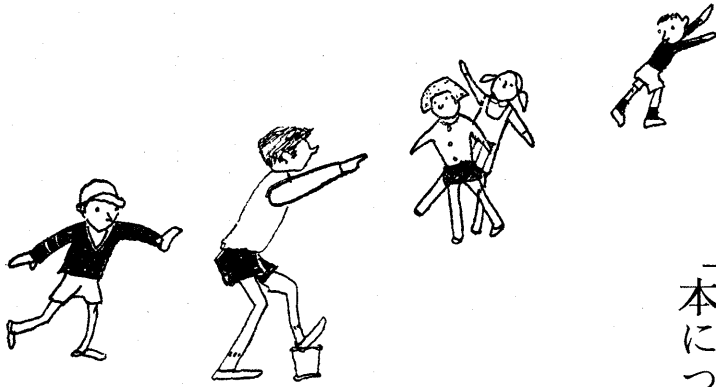


「本についての本」について……

渦岡 謙一



僕はどうも本が好きでないようだ。のっけから、このページにふさわしくないことを書いてしまったようだが、数少ない読書体験のなかで、純粹に読むことを楽しんだという経験がないからである。いつも、勉強のため、仕事のため、世界を理解するため、そして見栄と、目的意識が先に立っていたような気がする。そしてそれを、そんなに不愉快なこととも思っていないのである。ただ「本好き」とは、何の目的もなく読む人であるという定義は捨てたくないと思っている。だから、僕は本が好きでないのである。

おまけに本に対してほとんど関心がなかった。親はもちろん、小学校から高校と、本好きな先生にも友達にも出会わなかったし、大学は数学科ということで、『解析概論』『ルベッグ積分入門』などの数少ない必読書を、一日一

ページ、一年に、一、二冊読めば基礎ができるというような世界にいたからである。いまから考えると、退屈で退屈で死にそうなくらいだったのだから、岩波文庫の百冊くらい読めばよかったと思うのだけど、まったく読まなかった。こんなことでひまがつぶせるとは思いつきもしなかったのである。まあ、この百冊で世界が分かるなどというへんな諷い文句がついていたのだから、当然かもしれないが。

このような本にはまったく関心のない人間が本をつくる仕事についた。自分でも理由がよく分からない。数学に絶望したからまったく違う世界で、と考えたのかもかもしれない。もちろん、本をたくさん読んでいるから、あるいは本が好きだからいい本がつくれるかというところ、どうもそうではないらしいということはしばらくすると分かってきた。これは本の好きでない人間にとって幸運であった。いま「いい本」などといふ軽はずみなことを言ってしまったが、僕にとって「いい本」とは、ある程度売れるけれど売れ過ぎもしないという単に数量的なもので

ある。しかし、「数は、われわれのもつとも身近で、対象物に密接に交わりあう活動、すなわち触覚の拡張であり、それが切り離されたものなのである」とマクルーバンが言うように、数量とはそれほどばかにしたものでないだろう。

このような本に関心のない人間も、ある種の本は好きである。ブックカタログとかブックリストなどのガイドブックである。まったく目的意識に書かれた本といえようか。数年前、このようなガイドブックがちよっとしたブームになったが、軽薄な人間としてそのころ僕もある書店のブックリストを手伝ったことがある。その経験を通してか、あるいははもともとそういう本が好きだったのか、それ以来、意識的にその手の本に関心をもつようになった。素養のない人間が本と関わるにはこのような関心のもち方しかなかったのかもしれない。『びあ』とか『シティロード』を買ってきて、見たい映画や芝居にマルをつけるのが楽しいという人間が、ブックカタログに関心を持ち、面白そうな本をチェックして喜ぶというのも当

然といえは当然か。地図を前にした空想登山のようなものかもしれない。ただ少し違うのは、映画や山は見なくても行かなくてもいいが、本は関心をもったら手に入らずにいられないという点である。このようにして、一冊のガイドブックを読むと五十冊くらい読みたい本が出てきて、そのうち半分を買っても二十五冊で、またたく間にかんりの量になってしまふ。買うのに忙しくて読む時間がないということにもなる。

本など読まなくてもいい、積ん読で十分と思っていたが、あまりたまってきたので不安になり（居住条件のせいかもかもしれないが）、いまは会社をやめ、積んである本にとにかく眼を通しているところである。古本屋にもっていくにしても、眼も通さないのは、さすがに失礼なような気がするからである。

と、前置きが長くなってしまったが、要するに、このような結果において期待される「私の一冊」などというものを選ぶことは僕にはとてもできないということなのである。しかし引き受けてしまった以上、なにか書かな

ければならない。以下、お口に合いますかどうか、「私の好きなガイドブック」を何点かあげてみたい。

＊『ブックガイド82——ペーパーバックスの世界』（朝日ジャーナル、一九八二年三月二日号）文庫本、新書版を中心に、「都市の深層と表層」「犯罪と笑いの系譜」などの八つのテーマについて興味深い案内をしている。また絶版文庫本、洋書の掘り出しものについても有益なことを教えてくれる。この頃は多くのガイドブックが出たが、そのなかでも出色のものではないか。

＊『書物の世界』（山口昌男、中村雄二郎、高階秀爾著、青土社）帯に、「現代日本の知性を代表する三人の批評家が、さまざまな書物の論評をとおして広大な〈知〉の世界をさぐる」と謳っているように、迫力満点の〈知〉の世界への案内。「都市の書物・書物の都市」「時間論を歩く」などのテーマにみられるように、幅広いなかにも時間・都市・書物の隠喩的關係が一本貫いているように

ある。「書物をめぐる書物をめぐって」最後に論じられているのもうれしい。このような章を読むと読みたい本は一挙に倍増してしまう。

*『書齋のポ・ト・フ』（開高健、谷沢永一、向井敏著、潮出版社）虹をつかむ男たち——ロマン・ピカレスク頌
「手袋の裏も手袋——文学のなかの政治人間」などテーマは多岐にわたり、前著とはまた違った迫力がある。特に「末はオセロかイヤーゴか——児童文学序説」は、よくぞ言ってくれたという爽快感がある。

*『別世界通信』（荒俣宏著、月刊ペン社）「ファンタジーという文学形式を支えてきた〈昼の精神〉と別世界を論じたもの」と著者自身いつているが、巻末の文献が和文、欧文とりまぜてすごい。この方面にはマニアックな人が多いが、この著者には『理科系の文学誌(平河出版)』という別著があるように、合理的で抑制がきいていて信頼できる。

*『読書家の新技術』（呉智英、情報センター出版局）
変人だとうわさがあるが、書き方はまったくまっとう、論説的に筋道が立っており、巻末文献もすばらしい。いまはまっとうな人間が変人扱いされる時代かもしれない。『封建主義、その論理と情熱』（情報センター出版局）という面白い著書もある。

*『走れナフタリン少年』（川本三郎著、北宋社）
グラスの『猫と鼠』を論じて、「グラスは少年にとっては、初恋をすることよりも初体験をすることよりも、はじめて自転車に乗れた日とか、はじめて一人で泳げた日とか、がいかに重要であるかを知っているのだ」というくだりなど泣かされてしまう。すばらしい「フィクションのなかの少年」論である。

*『失われた世界の復権』（山口昌男、『未開と文明』、平凡社、所収）〈知〉の世界の導者、山口昌男を初めて知

った論文。文献案内としていまでもすばらしい。山口昌男の論文は常に読むことへの意欲をかき立ててくれる。

以上、ブックガイドの世界をちらりとかいまみたが、その他にも、海野弘、種村季弘、渋沢龍彦の本はすべてガイドブックとして魅力的だと思う。迷宮にさそわれるようでこわくなるくらいである。

また、これもミステリーガイドブックとして定評のある『深夜の散歩』のなかで、丸谷才一は、「あらゆる文学は文学に関しているし、文学をめぐるものだし、文学によって生まれた」と言っているが、これは当然、本についても言えるだろう。「あらゆる本は本に関しているし、本をめぐるものだし、本によって生まれた」。「本の本」とはブックガイドのことだから、これはすべての本はガイドブックであるということで、ここで僕の本の世界は一挙に爆発してしまう。当分、いや、永久に僕は本好きになれそうもない。

(新曜社編集部)

